

「2010年の街づくりと川づくり」

座談会



出席者

- 石川 忠晴 東京工業大学大学院
総合理工学研究科教授
- 大平 一典 建設省河川局防災・海岸課
建設専門官
- 残間里江子 ㈱情報・空間デザイン代表取締役
- 林 洋太郎 三井不動産㈱取締役
- 福井 照 建設省都市局街路課街路事業調整官
- 村橋 正武 立命館大学理工学部土木工学科教授
- (司会) 松田 芳夫 (財)リバーフロント整備センター
理事長

松田 本日は、「2010年の街づくりと川づくり座談会」ということで皆様にお集まりいただきました。今年は、リバーフロント整備センターが昭和62年9月に設立されてからちょうど10年目になります。センター設立の趣旨というのは、当時、建設省河川局の施策としてスーパー堤防整備事業という構想が打ち出されて、それをどうやって実現していくかということで議論が始まったことと、もう一つ、東京の街づくりというのが盛んになった時期で、そのときウォーターフロント開発とか河川を都市づくりの一つのキーワードにしていこうという動きが盛り上がった時期でありました。そういった時代の流れの中でリバーフロント整備センターが設立されたわけでありますが、10年経ちまして「川づくりと街づくり」というのがどういうふうに進んできたのか、あるいはこういった議論がどれだけ世間の皆様の評価を得るようになったか、単なるバブルじゃないかという批判だけが残るのかどうか、いろいろ御意見があるかと思いますが、今日は私共と関係の深い皆様にお集まりいただきましたので、この10年を振り返りつつ、2010年

の川づくりについての忌憚のないご意見をお願いしたいと思っております。

ウォーターフロント開発を振り返って

松田 まずは、我が国におけるウォーターフロント開発の先駆けとなった隅田川河口の大川端リバーシティ21は、林さんを除いては語れませんので、苦労話、その他何でも結構ですからお話下さい。

林 私が、昭和54年当時、石川島播磨重工業の跡地の開発担当になりました時は、大きなテーマが三つございました。一つは都心居住、当時はまだ物珍しく語られていたときだったんですが、都心の高密度居住ということ、一つは道路と橋を新しく架けよう、もう一つは今日のテーマの河川を有効に活かした街づくりをしよう、こういうのが大きなテーマであった訳です。前の二つは省略させていただきまして、河川を活かした街づくり、当時、リバーシティのキャッチフレーズを考えまして、中でも「水と住む」というのをテーマに掲げました。当時の隅田川は、堤防天端の高さがAPで6.5m、刑務所の堀のような堤防が敷地をぐるりと囲んでおりまして、川が都市の裏側というか、そういう扱いをされていました。ここに緩傾斜堤防をつくって街の表側にしようというのがテーマでございました。隅田川を中心に緩傾斜堤防をつくるというのは防災上の観点が主としてございました。関東大震災級の地震と高潮が一遍に来ると、ああいう構造物では何が起こるか分からない。伊勢湾台風クラスの高潮に対応するだけでなく、関東大震災級の地震対策も兼ねた堤防というのが主眼だったと記憶しています。

当時、都市河川室におられた溜水さん、今は兵庫県の副知事をされておりますが、こういうおもしろいプロジェクトを積極的に展開していこうということで、ようやくスーパー堤防（緩傾斜堤防）事業がスタートしていったということで



林三井不動産㈱取締役

ございます。当時としては、大変な議論で、書生議論、青臭い議論みたいな印象がありまして、スツと通る話ではなかった訳です。当時の隅田川は、メタンガスがブクブク湧

く汚い川で、河川サイドでは、宮村先生、今は、関東学院大学の教授をされておられますが、都市の住民に対して川に目を開かせようということで寒中水泳をやったり、隅田川でレガッタをやってみたり、川に人の目を引き寄せることによって河川を裏側から表側にしようという運動をなさっておられまして、先生にもいろいろご相談した記憶もございませう。

そんなことで、リバーシティは建設省の方とか、東京都の方とか、住都公団とか、あるいは中央区の方とか、みんなで作った街でございませうが、今あそこを見てみますと、リバーシティのみならず隅田川はかなりの部分、緩傾斜型堤防が出来ておりまして、そういう意味では、官民一体の最初のプロジェクトだったなというふうにしてございませう。それがきっかけになって隅田川の沿川が、ほんとに良くなったということでは、多少誇りと、ご同慶の至りという感じがするわけでございます。

一つ、当時のことで注文をつけるということで申しますと、川を表側にしたわけですが、私は十分じゃないと思っております。あくまでも川を景観としてとらえて、そこを散歩するだけで、水とは直接親しまないわけです。ほんとに川を利用するとすれば、船着き場とか、そういうものがあってもいいんじゃないか。当時そういう計画もしたんですが、流量計算の関係でどうのこうのという難しいことを言われました。船着き場一つあるとほんとに流量に関係あるのか、海の中に浮かぶ島に近いところでどの程度、流量に影響があるのか、理解出来ないまま長い物には巻かれたわけですが、そこら辺、ちょっと残念だったかなと思うところでございませう。

松田 大平さん、ウォーターフロント開発を、いろいろ御覧になっていてどういう感想か、あるいは、林さん達先輩の足跡を振り返っての感想をお話下さい。

大平 林さんと大体同じような感触ですが、ウォーター



開発前



開発後

大川端リバーシティ

フロント開発といったとき、借景の意味での水辺とか、情緒としてとか、そういった意味合いの開発が強かったんじゃないのかと思います。いずれも川を積極的に住民の生活の中に取り入れていこうという視点はなかったような気がしています。例えばスーパー堤防の説明図では、堤防の線



大平建設専門官

がスムーズに整っているんです。ところが、スーパー堤防は非常に高い地盤ですから、ここの堤防の線がスムーズになってなくていいんじゃないか。例えば荒川遊園の水上市階段は、ほんのちょいとだけ内側に曲げてあるんですね。スーパー堤防だったらこれがもっと曲がって、もしかしたら堤防の中にならずと水路のように入って行って、1区画のスーパー堤防の真ん中に親水公園があったり、マリーナがあったりという形で、川と住まいという区域の見えないバリアみたいなものを取り払うことができるんじゃないか。そういったものがウォーターフロント開発だとするならば、より街の価値、水辺の価値が上がるのかなということを考えておりました。一般の方が感じておられる感性の中では、河川というのはどうも遠いのかなと思います。我々も「洪水が流れる空間だから、いろんなことをしちゃダメよ」と言ってきたんですが、それが人々を河川から遠ざける方向へ追いやってしまったのかな、というのが一つの反省です。

松田 別に隅田川にこだわりませんが、ウォーターフロント開発というあの時代の中で村橋さんはどんなことをお



荒川遊園水上ステージ

考えだったか、御自分の仕事の中で水に関係のある都市整備の印象などをお願いします。

村橋 リバーフロント整備センターが発足して間もない頃に発行された『RIVER FRONT』第4号に書かせていただいたことがあるんですが、現在も、同じ問題があると思っています。それは、我々が街づくりを考える時、川は山や海と同じように外生的な自然条件としてとらえ、計画的にこれをどうしようとは考えないで、既にそれはそこにあるものだと考える。この考え方に立って如何にして街をつくっていくかを検討し、川のあり方については余り議論してこなかったんじゃないか。街の中の空間としての川の持つ役割や、現在、話題になっていますスーパー堤防整備の発想も含めて、街づくりとして将来の都市空間のつくり方を考える時、川をどのようにとらえるかということは都市計画の視点から完全に欠落していて、川は計画の前提として初めから与えられたもの、基本的には触れることが出来ないものという消極的な姿勢に立ってきたし、今日でもそうではないかと思うんですね。その意味で、スーパー堤防の発想は街づくりとの接点を求めている点でとても良い考え方だと思います。



村橋立命館大学理工学部土木工学科教授

例えば街づくりの中で、河川改修や河川管理の立場も踏まえながら、川はこう造りましょうということも真正面から検討することが大切ではないか。場合によっては大胆なことですが、川の姿や形を街の姿に合わせながら変えることだっていいんじゃないか。今の荒川は明治期に東京の街づくりに合わせてわざわざつくったのだし、新淀川だって大阪の街づくりに際して一緒につくったのですから。川をもっと街づくりに積極的に取り込んでいくことがあっていいのではないか。川のあり方については、これまでの固定した空間としての考え方ではなく、もう少し自由度のある扱い方にしたらどうかということです。うまくいっていない反省を込めて申し上げておきます。

川は、人の住み方次第、だから、街全体がウォーターフロントです

松田 石川先生、学問の立場から河川の管理と街づくり

といったとき、若干の断絶みたいなのところがあるのかと思いますが、日頃お考えになっていることをご遠慮なく言っていただければと思います。

石川 今、議論があったことと話がつながらないかもしれませんが、ここに参加させていただくことになったときに感じた「川づくり」と「ウォーターフロント」の言葉上の違和感を先にお話ししておきたいと思います。ウォーターフロントというのは、もともとは港の倉庫地区の再開発と関係が深いわけで、今お話があったのも大河川の最下流部、景色としては海にかなり近いところの話です。隅田川の下流部は、私の抱いている川のイメージとずいぶん違って、ほとんど海のような感じがするのです。

川というのは、雨が集まって流れてくるところというわけですが、雨は地面に均等に降って、それが徐々に集まって川は太くなっていきます。ですから、私のイメージする川は、線とか帯とかではなくて、面という感じです。ちょうど、毛細血管まで合わせると体中が血管であるように、川は流域を覆っていると思うんです。そうすると、流域にある街の有り様が川の状態に直接、影響を与えます。

ところで、街というのは単に建物とか施設とかを指すのではなくて、人が集まって暮らすところですね。ですから、人がそこでどう暮らすかというのが街のあり方です。街づくりとは、暮らし方をつくることです。例えば、どこの道でもハイヒールで歩けるようにライニングすると、川の流れや形は変わらざるを得ません。また、洪水時に地表の汚濁質が流れて、水質も変わります。ですから、水辺と街づくりの関係を、私は、そこでの私達の生活様式をどうつくっていくかということで考えたいと思うんです。

少し話はそれますが、私は最近、環境教育に興味を持っているのですが、そのきっかけが今お話したようなことなのです。宮城県の塩竈神社の前を流れている葎川という川が、かつては相当きれいだったのですが、上流域に街が出来たために、普段は水が全く流れなくて、ちょっと雨が降ると氾濫するようになり、その対策を市役所から相談されました。その時「街の住み方が悪いので、こうなっているのです」と申し上げました。「降った雨を、ゴミをポイポイ捨てるように流すから、低いところで洪水が起きるのは当たり前であって、それを止



石川東工大・大学院総合理工学研究科教授

めれば川も元どおりになるでしょう」ということを街の市民集会に行ってお話ししました。それを繰り返しているうちに、街の暮らし方と水問題の関わり方について、義務教育あたりできちんと教えたらよいのではないかと思います。街の中での私達の生活と水害の関係とか、街での水の使い方とダムとの関係とか、そういうのを整理して環境教育の冊子をつくり、小学校で環境授業をはじめました。

要するに、ウォーターフロントという言葉が、海岸や河岸という線で街と水域が接しているというイメージをつくってしまっていますが、本当は私達の街の中で接している。つまり街全部がウォーターフロントだと私は思うのです。そこをベースにして、水辺と街づくりの関係を考えていくのが大切ではないかなと。全然前の話とつながらなくて申し訳ないんですが、そういうことを考えています。

松田 今のお話、かなり本質的な話ですが、私があえて言うと、隅田川というのは、沿川の土地は、降った雨水でさえ地盤が低からポンプでかき出さなきゃいけないようなところだし、自分達がつくり出した家庭の汚水だって下水処理場を通して海へ流すということですから、石川先生のおっしゃったような意味での河川と、そこに住んでいる人達とは縁がないんです。表を流れている川とその裏に住んでいる人達とは、風景を借りているぐらいしか縁がないんですね。それを林さんは体感的に感じ取られて、もう少し人間が川と接点を求めようということで、船にでもさっと乗れるような施設があれば、今は景色を借りているだけだけど、次のステップがあるんじゃないかと先程おっしゃられたと思うんです。

石川 はい、おっしゃるとおりで、だから「前の話とつながらなくて申し訳ない」と言ったのですが、大都会の中に住んでいると、大河川の下流部を川の代表として考えてしまうことはないでしょうか。私は田舎の川とか湖とかで観測をやっているものですから思うんですけども、日本の普通の川というのは、必ずしもああいうものではない。必ずしも代表的なものではないと思います。もちろん、大都会の活動の盛んなところの近くにある水辺は非常に大切なものです。ただ、2010年の街づくりと川づくりというふうに行ったときに、その他のごくありふれた川もすごく大切です。そこは考え方がかなり違うべきではないかなと思うのです。

松田 よくわかりますけれど、大平さんから石川先生のいろいろな御批判に弁解していただけないでしょうか。

大平 弁解というか、私もどっちかというと同じような

意見を持っておりますから……。(笑)ウォーターフロントというのは、僕も海の方と思ったんですが、先生は大分広げられたので、あえて言いますが、我々、川を見るときに、先生は住まい方と言われましたが、今まで、人間を見てこなかったのかなという気がしたんです。荒川の下流部というのは年間、我々の調査で3,300万ぐらいの人が利用している川なんです。日本一だそうですが、スポーツが目的の人もいれば、散歩しながら友達を探しているという人もいますね。それを別な言葉で言うと、出会いの場を探していたり、あるいは都会でのいろんなストレスを解消する癒しの場みたいになっているんですね。そういったことに対して我々が川としてそれを受けられるような整備をしていたのだろうか、考えるところが多々あるなど。荒川には、自転車で来て、絵を描いているおばさんなんかいるんですが、そういう絵を見て誰かが話しかける、それで会話が起きる、というのが結構ある。そういうことから考えていくと、川というのは単に洪水を流す場ということではなくて、21世紀に人間が人間らしい生き方を見つける場あるいはそれを取り戻す場なのではないかと思います。そういった意味からいうと、川のそばに住んでいる人のためだけではなくて、広く街の中でそういう場を提供出来ますよ、ということ呼びかけていかなきゃならない。ただ、そういうものは我々だけでは決められないので、多くの人達の意見を聞き、一緒になって計画をつくり、いろんな方に「あなたにとって川は何ですか」という呼びかけをしながら、地域全体で川を考えなきゃいけないのかなということを常々思っておりました。水の流れの中で、あるいは人の住まい方の中で川はどういう意味を持つのかという視点がこれから要るのかなと。それを我々は水循環という言葉で言い表わそうかと思っておりますが、水循環的な視点、それに心の循環を入れたような形で川のあるべき姿をこれから見ていきたいなと思っております、それは弁解というより、反省も含めて我々が目指しつつあるところでございます。

川をバッドアドレスからグッドアドレスへ

松田 だんだん本質論になって難しいんですが、残間さん、街づくりと川づくりという単語を二つくっつけて、どんなイメージですか。

残間 街と書いてしまうと大きな街、都市という感じがしてしまうんですが、全体としてこれまでの整備の仕方は、作り過ぎるというか、きれい過ぎるんじゃないでしょう

か。ほつれがないというか、隙がない。隅田川あたりも行ってみると、決して不快ではないんですが、川に入れるという感覚あるいは水に触れるという感覚より、禁止されているという感じがして、作り方が排他的というか、分けられている。だから、自分にとっては、余り関係がないという感じがこれまではしていましたね。簡単に言うと、創る側にセンスがないんだろなと思うんですが、もうちょっと違うやり方があるんじゃないかなと思います。ほつれ部分の演出が下手なんですね。人間もそうですが、ほつれたところに人の思いが込められていて、接触したり、感じ入ったりするわけですが、完璧にその部分が閉ざされている。手を出そうにも出せないという感じがしましたね。スーパー堤防も、ゾーニングされた都市が川のそばに設置してあるというだけのように思います。川のそばに区画を持っていったという感じがこれまでのスーパー堤防の作り方にはあったと思いますが、最近は、徐々に変わってきているような感じもします。



残間樹情報・空間デザイン代表取締役

それから、かつてリバーシティの計画を知った時、どんな街になるんだろうと、大いなる期待を持って見ていました。私はもともと田舎生まれのせいか、都市の中でのだけ過密なところに住んでいたいと思っていて、静かなところで生きていたいとは余り思わないんですね。一番過密で、一番喧噪な中に身を置きたいと思っていましたから、アークヒルズみたいな都会の中の都会が好きなんです。あんな感じなら、すぐにもリバーシティに移り住みたいと思っていたら、すぐにはそうならなくて、ちょっと時間がかかったんですね。今や高感度の人達も住んでいるみたいですが、いろんな人達が住んでいるということが伝わってくるに及んで、そこに住んでいる人達のセンスの度合いと街のセンスとを量るみたいなのがあって、住んでみたい順位で言うと高い順位にはありますね。ただし、私の中では、川のそばだからというよりも、そこに住んでいる人達のセンスというか、共同体のセンスが気に入っていて、あの中に身を置いてみるのもいいなという感じです。だから、私のイメージでは、川は主役ではなくて、脇役として機能している。せっかく高感度なイメージが出てきただけに、街と川の新しいイメージづけが出来るような気もするんですが、余り川を上手に利用しているようには思えませ

んね。

松田 今のお話で言うと、リバーシティの魅力は、東京駅に近いとか、街のど真ん中からいきなりパッと違う空間に出たということであって、川はどっちかという脇役ですかね。

残間 率直に言ってしまうと、決してグッドアドレスの場所じゃなかったわけですね。成城とか田園調布とかと比べると。パッドアドレスというほどでもないんだけど、下町という感じだったのが少しずつグッドアドレスに近づいては来たけれど、そこに川という要素は余り入っていないと思うんです。グッドアドレス化の途上、川の魅力がジワジワと入り込んできてもよかったのに、たまたま川のそばにグッドアドレスゾーンが出来たというふうにしかならない、ちょっと惜しいですね。最近では、花火がよく見えるとか、桜の季節がいいとか、屋形船で前を通れるとか、川の周辺企画は出て来ていますが、それはリバーシティ自体が作ったものではなくて、後づけで出てきたものだと思うんです。だから、そういうところに積極的に関わっていくとか、自分のところでそういうアプリケーションを作ってもいい時期に来ているんじゃないかなと思います。

大平 荒川というのは、川の中に防災用の光ファイバーも入っていれば、災害時に緊急車が通れるような道路もあるし、荷物を運んでくる船着き場もあるんです。荒川と隅田川の間で住都公団さんと新しい街づくり（足立区新田地区）を考えているんですが、当初のテーマは東京フォレストといって、森のある住宅地で、その計画の中には川がなかったんです。今、住都公団さんと森もやりますが、災害用に引っ張った光ファイバーをきちんと中に入れ込みましょうと話をしています。もう一つは、せっかく隅田川と荒川があるんだから、マリーナとセットで売れないか。荒川へ出て、海にも30分位で出られるんですが、森が

あって、情報通信もあって、川であることのメリット、マリーナもということをも今、一生懸命考えていまして、これは既に事業が具体化していますので、そういったことが出来るんじゃないか。それだけで足りるのかどうかというのはこれからの議論だと思いますが、かなり考えております。

川の水をH₂Oと感じますか？

石川 残間さんが言われた中で、こちら側と川の間が仕切られているという感覚を持つのは、街の方にも原因があると思います。東京は中小の川がほとんど見られない所ですが、昔は自然の川がたくさんあったわけで、昭和30年代の終わりぐらいからどんどん蓋をかけて見えなくしてしまいました。その結果、一人の人間のサイズで感じられる親しみやすい水辺が無くなっています。荒川や隅田川というのはめったにない大きな川で、そこにいきなり親しみを持つてといっても、感覚的に違和感が生じるものだと思います。

もう一つは、私達が普段接している水が、水道の水と下水ぐらいしかないことです。私達は普段、昔の人に比べれば大量の水を使っているわけですが、それは自然の水という生きた存在と言うより、H₂Oという無機物と言った方が正しいと思います。本来は、雨が山に降って、川を流れて、それを取水して生活の場に導いている訳ですが、そういう感覚がない。ですから、湯水の時、テレビでダムの水がものすごく減っているのを見ながらジャージャーと水を使ってしまうのです。そういう意味で、普段H₂Oには触っているんだけど、水は元来、自然の中を流れているものであるという感覚がないんだと思います。そこで、怖いと思うのは、そういう感覚の欠落が個々の人間だけじゃなくて、組織的にもあるということです。この間の湯水の時、新聞で、「湯水の原因は利根川河口堰で水を流し過ぎるからで、もっとうまく運用すればこれほどの湯水にはならない」と書かれていました。私の研究室の学生は河口堰の下流で潮の運動とか酸素の欠乏を観測しているんですが、河口堰でこれ以上水を絞ったら、下流の生物や漁民は困るに決まっているのです。このように、自然の川としてあるべき要件を、人間の都合によって損なうことが当たり前のように、組織的に考えられている。川の水は、私達がH₂Oを確保するためだけのものではない。そういう意味で、私達の社会が川というものと、本当のつき合いが出来るんだろうかということを危惧するわけです。話はまた少し飛びますが、湯水の時ぐらいは水を節約しそうなものですが、みんなやらないですね。取水制限をかけられて初めてやるわけで、



東京都足立区新田地区

これは私達の社会の自律性が失われている証拠ではないかと心配しています。人間の体は多くの細胞の集合したシステムですが、怪我をしたり病気がしたりして危なくなると、必ず自律的な運動によって調節し、システムを保存しようとします。社会システムも本来そういうものですが、我々の社会はそういう機能が失われてきていて、その単純な例が水とのつき合い方に表われているような気がします。それが例えば、ウォータフロントに接したときに自分の生活とは無縁な空間とを感じる、何となくそこにバリアを感じるという、一つの原因になっているというのは考えすぎでしょうか。

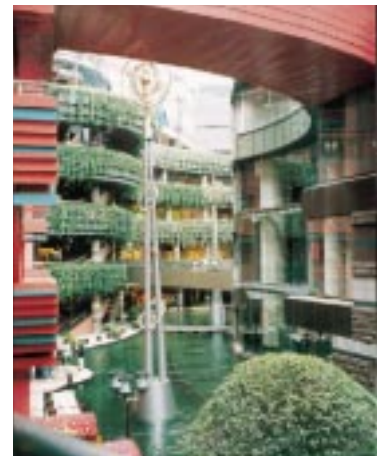
松田 東京にお住まいだと、そういう感覚が強いのでは。池や川の水が水道から出てくる水と同じものだとはなかなか思えないんだけど、千葉県に住んでいると、いかにも水道の水が泥臭くて、確かに川の水を飲んでいるなという実感がひしひしとわかりますが。

残間 私は水道を信じていないんですね。H₂Oと感じるならまだいいんですが、水とも感じないし、H₂Oとも感じない、感覚としては、毒に近いかもしれない。体に悪いものがそこにあるという感じですね。都市河川を見たとき、おっしゃるように川のせいだけではなく、こちら側のせいでもあるのですが、総じて東京の水を信じてはいないですね。さわったらはれ上がるんじゃないかという感覚に近いものがあるから、リバーシティに親水施設を作ったとしても、足を入れても大丈夫かなとか、足はまだいいだろうけれど、手を入れたら明日の朝、腫れ上がるんじゃないかしらという感覚がありますね。だから、もう一度信用を取り戻すというか、安心を取り戻すまでは、あの川には行かないんじゃないでしょうか。水にスッと入るといのは、何の既成概念もない子供たちぐらいなもので、親は多分「やめなさい、汚いから」というところに都市の河川があるかと思えますね。大平さんは、荒川のことを一生懸命おっしゃっていたんだけど、何となくまだ信じられないというか、ちょっと怖い、そのまま入れるのかなという感じがどうしてもありますね。

林 今のお話で、それをそうじゃなくする方法は、一つは自然回帰みたいな方向を目指すのと、もう一つは、村橋さんがおっしゃった話と絡むと思うんですが、都市というのはそもそも装置で、川も都市の装置の一つ、徹底的に管理する。水質が悪ければ水質管理する、空間がなければ空間をつくる、親水の場所がなければそれをつくる、水量が足りなければ流す、徹底的に管理する、都市というのはそれでいいんじゃないかと僕は思うんです。自然を都市の中

にどうという発想もあると思いますが、東京みたいな大都市では村橋さんと似た感覚で、装置なんだから、河川も徹底的に管理する、それをどうしたらいいかというふうに行くべきだと思うんです。河川一般がそうじゃなくて、東京のような街にある河川ということだと思います。例えば千葉の何とか川とか、静岡県の何とか川は違うと思うんですが、東京のような街における隅田川と、荒川や多摩川はまた違うと思いますが、徹底的に管理する河川があっというんじゃないかという気がします。

村橋 林さんの意見を繰り返しますと、街づくりの面からみますと、街づくりは市民生活や都市活動のための空間づくりでありますから、空間を構成する要素として、道路や鉄道等の交通施設を計画したり、活動の場である建物を計画したりします。また、オープンスペースとして公園緑地を計画したり、河川についても配慮します。この中で河川は、今おっしゃったことを言い変えれば、疑似自然体験の空間と考えてはどうかということです。本当の自然ではなくて疑似自然体験の空間、しかもさっき残間さんが言われたことの逆ですが、稠密な街中であって、ある開放感の味わえる空間であって、少し情緒的な言い方をすれば、心の癒しの場、あるいはコミュニケーションの場にもなる。これまで、そういう場を都市の中に装置として計画するのは、せいぜい公園とか緑地しかなかった訳です。今日になってやっと道路についても、車を走らせる空間としての性格だけではなく、都市の中の空間としてどうしつらえるかが議論され始めたところですよ。ところが、河川に関しては依然として別枠のような扱いが強い。もう少し街づくりの中にそれを持ち込む発想がお互いにあるといいのではないかと思います。さらに川を都市の装置としてとらえる見方について付け加え、一つは今ある川を積極的に街づくりに生かしていくことであり、他の一つは、新しく川を作ることの二つの考え方を持っています。後者については、人工的な河川であれ、池でもいいんですが、疑似的な空間を意



キャナルシティ博多

図的に作り出し、その周辺を一体的に整備することで、既に福岡市のキャナルシティをはじめとしてたくさん生まれ始めていますね。ああいう作り方は、それぞれに良いところと悪いところがあると思うんですが、大きなコンセプトから言えば、今まである河川空間を積極的に街づくりの中に持ち込んでいくことと、無かったものを新しく作っていく両方の方策をうまく組み合わせて街の中に擬似的自然空間をふんだんに作ってはどうかというものです。

河川屋はコーディネーターになるべし

松田 大分話が広がってきたんですが、リバーフロント整備センターが出来て10年、この間に、河川側の物の見方あるいは周辺の状況も少し変わってきたと思います。一つは、10年前に比べると、最近は自然生態とか生物的な話とか魚の問題がクローズアップされて、極端な話では、東京の都市河川みたいなところでアユやサケを戻そうとか、という運動があります。最近、子供のつき合いでディズニーランドへ行って船に乗ったら、ジャングルクルーズ、造り物も良いところだけれど、あれが非常に川らしい。(笑) これくらい人間って簡単にだまされるのかと思って、改めて感心したんですが、林さんの御意見のように都市の装置と割り切るといのもわかりますね。



松田理事長

村橋さんがおっしゃった都市の中の空間ということでもう少しという議論は、河川の人も本気で考えていると思うんですね。道路空間が都市空間として意味があるということ以上に、河川の人達は、ほんとの意味の緑地なりオープンスペースに匹敵するのは川ぐらいしかないんじゃないかという自負心も持っていると思いますが、都市の設計をする人からそういうふうに思われていないというのが河川不幸なのかもしれない。福井さん、河川局の人といろいろお話になっていて、あるいは河川と都市計画を考えていく上で、何かお気づきの点がありましたら。

福井 役所同士でも、河川局とか土木部河川課の方とお話するのは呻吟を極めておまして、これは過去完了形であることを望んでいるわけですが、河川協議というのは非常に時間がかかる。国鉄協議も時間がかかったんですが、非常に時間がかかって、非常に厳しい、固かったというこ

とを、代表して言わせていただきたいと思います。今でも、「おれは淀川だ」「おれは利根川だ」という人がいるんですね。「おまえは単なる職員だ」と言うんですが、「おれが洪水から守ってやっている、おれがすなわち淀川だ」という人がいるものですから、そういう人達の意識改革するのはまたエネルギーの要ることだと思います。

今、都市行政の方も歴史的な転換点にあって、新市街地ニュータウン施策から既成市街地に再構築、都市化の時代から都市の時代、広がる時代から今の都市を整備するという歴史的な大転換点に立ちおまして、密集市街地に行ってお話ししないといけない時は、街づくりまじょうとか、道路を作ろうということからスタートは決して出来ない訳です。絶対に出来ない。つまり、生活再建とか生活設計とか、あなたの残りの人生、お子さんや、孫の人生をどうしようという生活再建の行政が求められている。というのが都市行政の直面している課題です。つまり、全人格的な知識も要し、体制、組織も要するということです。そう



福井街路事業調整官

いうことから考えると、スーパー堤防じゃなくてもいいじゃないか、家を建て替えるために河川局で事業をやっているという見方もできるわけですから、人間回帰なら、呼び方から変えたらどうかという気がしてます。そんなことから、土木というのは時代から捨てられたというふうに私達は思っているんです。つまり、道路も公園も作らない区画整理事業を始め、土木は時代から捨てられてもいいと。誰かの言葉に「捨てられた女より、もっとかわいいそうなのは忘れられた女」、だから時代から忘れられないように記憶に残る仕事をこれからしたいなと思っています。全人格かつ記憶に残り、施設から発想しないというのが都市行政の直面している課題なので、それで河川行政と都市行政が手を取り合っていくのがいいかなと思います。

松田 また、難しい話になってきましたね。(笑) そうすると、施設行政じゃなくて、都市の時代、そこに住む人たちのことからスタートするということ、具体的には家を建て替えるとか、そういう話になってくるのですか？

福井 例えば阪神大震災の時、コンサルタントとして一番役に立ったのは弁護士さんです。区画整理関係の土木技術者、建築屋さんではなくて、弁護士なんです。そういう仕事がかから出て来るんじゃないか。だから、福祉のこ

ともわかるし、土木こともわかるし、建築のことも、年金のことも、不動産のこともわかる、そういう人が組織の中に一人いないと何も進まない。

松田 技術屋より弁護士さんの方が役に立つんだということですね。

福井 そういう意味で、厳しく反省しないといけないと思います。

石川 福井さんが言っておられる「施設から発想しない」ということは、非常に大切なことだと思います。装置とか施設という発想はものごとを「機能」で見る発想で、技術屋は当然そういう発想をしますし、現代人は大体みんなそんなんですね。それが今の文明をすごく歪めているような気がするんです。例えば、ウサギの耳はなぜ長いと聞かれると、それは遠くの音がよく聞こえるようにであるという説明をすることが多いです。キリンの首はなぜ長い、高いところの葉っぱを食べられるようにである。ゾウの鼻はなぜ長い、手の代わりを出来るようにである、という具合に機能を考える。それではウサギのように耳が長くて、キリンのように首が長くて、ゾウのように鼻が長い動物がいたらさぞ便利だということになります。そんなものは世の中にいません。なぜいないかというと、簡単に言えば、不自然なものは持続性がないということです。このように機能の足し算で物事を考えていくと、環境の中で存在出来ないものを考えてしまうと思います。

それに関連して、最近の河川法の改正で建設省の方達が説明されるやり方に、私は多少不満があるんですが、それは「今まで治水・利水と考えてきたけれど、それに環境を加えて」という言い方をなんです。加えてというのはおかしい。今まで耳が長くて首が長かった動物を、今度は鼻を長くしようかという話ではないでしょうか。これは建設省の人がそう考えているというより、多くの人がそういう発想をしがちだということで、例えば、ふるさとの川モデル事業で多自然型工法を採用するというと、地元の人もみんな賛成するんです。今までと同じような治水安全度、利水安全度で、それに自然が加わればいかに決まっているけども、そんな川はなかなか維持できません。木をいっぱい川の中に生やせば、洪水のときにはゴミやビニールが引っかかって、粗度係数も大きくなるし掃除も大変です。これは治水安全度を下げるか何かしなければ成り立たない話で、全体を考えると発想が必要であると思います。水辺環境をつくっていくということは、単に川の中に装置をつくるのではなくて、全体としての新しい川を社会の中に組み込んで維持出来るようにトータルとして考えることだと思います。

ます。福井さんの考えと同じ意味かどうか分かりませんが、福井さんが言われた地震時の極限の状態では、今まで個々バラバラに足し算で考えていたことが、実はそうではなくて、生活というトータルのものが大切であることがわかる。それと河川計画と似たような印象を持つんですが。

松田 細かく分解して、総合すれば何か出来るという方法論はもう限界だと。

林 もう一つ、日本に河川が幾つあるのかわからないんですが、宮村先生の話だと一本一本違うと。一本一本違う河川を総論みたいな形で片づけようとする、今おっしゃったような足し算型河川、それを隅田川に持ってくるわけにいかないし、神田川に持ってくるわけにいかない。総合的に語るときは多自然でもいいし何でもい、メニューをたくさん用意しておいて、この河川にはどのメニューをとる、この河川にはどのメニューをとるということではないわけで、それを総論的に河川はどうあるべきだというのはなかなか難しい話なんじゃないかな。

石川 そうだと思います。環境を見るときその視点が一番重要だと思います。どの川も違う、どの湖も違うというのは、現地観測へ行ったとき非常に感ずることなんです。それを一つの学問体系とか技術で扱おうとすると無理がある。学生には、こういう言い方をするんですが、例えば人間というものを理解しようとするとき二つのやり方がある。一つは、医学のような立場であって、人間の構造を分解して一つずつ調べ、それを組み合わせれば人間の体だという理解の仕方です。しかしこの方法では、人間の平均的な体の仕組みはわかるけれども、人間を本当に理解したことにはならない。なぜなら、現実に存在する人間は、平均的な人間が1億人いるのではなくて、みんな少しずつ違う別々の人間が1億人いるからです。そこでもう一つのやり方は、小説家のような立場で、あれは明らかに人間の研究をしているんだと思いますが、小説の中に現れる人間というのは平均的な人間ではなくて、ある生き立ちを持って、あるシチュエーションで、ある行動をする個別の人間です。そういう意味で普遍的な人間ではないけれども、いい小説を読んだ後には、人間とはそういうものか、人生とはそういうものかという普遍的な感慨を持つわけです。

環境を見る場合もそういう立場がなければいけない。私は前に東北大学にいたんですが、東北地方の人達が話しているのを聞くと、建設省では関東のやり方が全国版としてポンと来ることが多いんだそうです。しかし「だけど、そのとおりにはいかない」という話もよく聞きます。河川は一つ一つ違うという立場で個々の河川を見ながら、それを

一体どうするかという思考を積み上げて初めて総合的な考えが出てくると思うんです。環境アセスメントというのは元来そうで、それぞれ個別にどういふうになりますかということを引きちんとしなければいいものは出来ないという考え方が根底にあります。川づくりでもそういうプロセスがあると、流域に住む人々と川との接触はより深まると思う。「これが自分のふるさとの川である」という川づくりが出来るようになるんじゃないでしょうか。

残間 松田さんが河川局の現役時代の会合で、河川の工事事務所長のセンスが話題になり、「それをチェックしてから所長にしたらどうか」と下河辺さん（㈱東京海上研究所理事長）がおっしゃったんですね。松田さんが「そんなこと、書類には書けないんですけど」みたいな話で、終わったということがあったんですが、それって先程、福井さんがおっしゃった「利根川はおれだ」みたいなのと繋がると思うんです。

この間、住都公団はどうやって存在意義を解ってもらおうかみたいな会合があって、提言の中に、「これからは、街づくりのコーディネーターとしていくべきだ」みたいな意見があったんです。その時、私、「コーディネーターってものすごく難しい仕事なんですよ」という話をしたんですが、コーディネーターって、一見軽やかで誰にでも出来るそうですが、人と人をつなぐ役ですから、生き方の幅も人間の幅も広くなくてはいけなくて、多種多様な生き方を認める器量もなければいけない。もちろん、自分自身の人生のプログラムも多彩じゃないと、コーディネーターにはなれないんですね。人事部長の感性が豊かじゃないと、その人事部長以上に感性豊かな人は絶対網に引っかかってこないということがあるのと同じで、コーディネーターになるというのは、スペシャリストより難しい。最近では、市民の権利意識が強いですから、そういう人達の欲望の図式も見抜く能力も必要です。川の意思も人間の意思も全部を同じところに並べて、その都度プライオリティーをつけていったり、ケーススタディーを踏んでいくことが出来る能力のある人がいないと、うまくいきにくいですよ。

さっき土木は終わったとおっしゃったんですが、これまでは土木的発想が強過ぎたんだと思うんですね。土木的発想というのは、その道の技術的スペシャリストではあったけども、人間界の欲望地図みたいなものをよそに置いてしまった人達が、少なくとも今まで、川についていえば中枢を占めていた人達だったなという気がするんです。これからは野に下って、たくさん人間の事例を見ることが大切です。私は役所の人、若いうちに給料を上げて、いろ

んな所に行けるようにしてあげなきゃいけませんと言うんですが、役所の人達がコーディネーターになるためには、自分のお金でいろんなところへ行って、いろんな体験をしないとダメですね。

松田 非常にいいお話をいただいたんですが、先ほど福井さんのお話で、「おれは利根川だ」「おれは淀川だ」というのはけしからんみたいでしたが、残間さんがおっしゃったトータルのコーディネーターとしての「おれは関東だ」とか、そういう意味だったらいいんでしょう？

福井 それはいいんですよ。

松田 単なる川のことだけに詳しいのが「おれは利根川だ」というから何だと、こういう訳ですね。

村橋 それは言い方を変えますと、一般に施設を計画し、整備、管理する人間にとって、人の痛みが判ることが大切だということだと思います。特に、計画者は人の喜びとか評価されることをもって良しとするような価値観で、物を見ている人達では絶対ダメだと思う。先程、震災の例がありました。人がピンチの状態になったとき、その人がどういう状態であり、何をしたいかということに共感を持つ豊かな感性と、それに対し社会的、制度的に打つべき方法を検討し、これを提案できる鋭い知性を備えている人達が育っていかない限り、ダメだと思うんです。即ち、自己中心ではなく、他人の痛みを正確に受け留め、これに対する対処方法を考えることが出来る人間こそが、コーディネーターとしての資質を持った人間ですね。例えば我々の生活をみたと、石川先生の言葉で言えば、住まい方とか生き方を通して、普段の生活で自分達は何をしようとしているか、他の人達とどのような関係を持っているか、ということをご自分で自分の想像力を働かせて、理解しようとする姿勢を持っているかということですね。したがって大平さんが言われたコミュニケーションの面で川の作り方に人の交流の役割を持たせようとする場合、単なるアンケートの結果によって、皆さんがこう言っていますから、それではこのような作り方をしましょうというのではなく、つまり、人に問いかけて初めて課題と対策を考えるのではなく、自分の生活感覚をもっと研ぎ澄まして、かつ、ふくらませて人々の生き方はどうであろうか、それに対してどうすれば良いのかということ想像力をたくましくして自分の考え方として作っていく。そういう人々が徐々に育っていけば、建設省も含めてよくなるんじゃないでしょうか。

石川 さっき「おれは利根川だ」「おれは淀川だ」という話がありましたが、私、それが環境保全で重要なことだと思っているんです。街がきれいに保たれるというのは、

昔でしたら自分の家の前の道路は毎朝掃いて、水を打つのは当たり前でしたね。それは別にボランティアでやっているんじゃないで、自分の家の前の道路は半分以上、自分の物だという意識だと思うんです。下町なんかへ行くと植木鉢が出ていたり、縁台で将棋を打ったり、それが公共の道路であったりするわけですが、何か私物的に感じられる。だからこそ、自分の道具を手入れするように、掃除をしたり水を打ったりもする。その結果として、環境というのは保全される。ここは自分の物だという意識が、何かしなくちゃいけないという意識になります。逆に、ここはあの人のテリトリー、例えば公園があって、毎朝おじいさんが掃除しているようなことになると、汚すにしてもおじいさんの顔が浮かぶとか、そういう私物性が環境を保全する上での大きなポイントだと思うんです。河川敷は、最近ゴミがポンポン捨てられるわけだけれど、100%公共物だということにするから、逆に誰のものでもないということになって汚されるわけです。

ですから、川に関係して、そこで長いこと仕事をしている人がいて、意識として、利根川の半分は自分の物だと思うぐらいの人がいて、初めてコーディネーターとして機能出来るような気がします。

川にお詫びして、川に恩返しをしよう

大平 私が荒川の住民のみなさんに言ったキーワードは、「一度川に詫び、川に恩返しをしてみませんか」と呼びかけたんです。先ほどから、装置で徹底的にという話が林さんからございましたが、徹底的に装置として都市の中で川はやっちゃっているんですね。そういったときに、今までの川とのつき合い方の100年を見ていくと、川をドンドンいじめて、自分達の生活を豊かにしてきたんだけど、ほんとに豊かになりましたかと。今頃になって、川は癒しの空間である、自然が大事だ、ランドはやめて自然をつくれみたいなことを言うてくるわけですよ。その時にその人達に言ったことは、「それはわかるけれど、今までの歴史、あなたの歴史、あなたのお父さんの歴史、そういった中であなた方、川に対するごめんなさいという気持ちとか、川に対する恩返しの気持ちがあるんですか、単に欲だけを川に押しつけているんじゃないですか。個性を豊かにしろとか生かせといったとき、みんなが川に対して恩返しをしようという気持ちを持たないとだめなんじゃないですか」こういう呼びかけをしているんですよ。そういう観点で恩返しをしようとして考えた中で、よくよく荒川と語り合っ

てみたときに、荒川が訴えかけるものがわかれば「荒川の主です」と言えるようになってくるのかなという気がするんです。コーディネーターになろうと思えば、そういった感覚を我々が持たなきゃいけないし、同時に周りの人にも持っていたかなきゃいけないと思うんですね。

これから街づくりの中で、川を装置として考えるのはいいと思うんですが、装置を使う側の人達も同様に川に対する恩返しというか、自分達の生活を豊かにするために川の空間の価値、僕は川は装置じゃなくて、出会いの場だとか、生きがいを見つける場だとか、癒しの場だとか、場だと思っているんですが、場の価値をもう一回、都市計画の方々も再評価していただく必要があるんじゃないか。今まで固いということだけで、河川屋に対する不満はありましたが、川そのものを見てなかったんじゃないかという気がするんですね。それで「川にごめんなさいして、恩返しをしよう」と言っているんですが、どうでしょうか。

石川 それは環境教育そのものじゃないかと思います。私自身、環境教育をやりたいと思ったのは、川を見ていて、そういうことが必ず必要だと思ったからです。結局、我々の社会では公共事業が、余りに手厚く市民生活を保護するようになって、自分と環境との間の物事のつながりが見えにくくなってきているような気がするんです。数十年前に隅田川がこういう状態になったのと私達の生活とはこういう関係にある。そういう物事の大勢の人が理解するようにならなければ、環境問題は解決されないというか、どこかにそのシワ寄せがいくと思うんです。

これだけ社会が快適で便利になってきたのは、一つには、問題を外へ外へシワ寄せしたことがあると思います。例えば、水害がある所で起きれば、それは下流へ向かってどんどん流すとか、汚濁物が出れば、それは見えないところへ持って行って処理するとか、そういうことはある規模まではオーケーだったけども、しかしあるところからは無理なわけで、そういうふう外にどんどん問題を放り投げてきた結果、だんだん地球環境が変わってきたというのが環境問題の現状です。河川の問題は小さいけれども、そのシンプルなものなんです。

今、大平さんが言われたように、私達の暮らし方と川の姿はどういう関係にあるかということは、河川事業をやっている人は説明出来るはずですよ。それなのに余りに「手厚くやりますよ」という形でどんどんやってきたところに、いろいろな問題のシワ寄せが出てきているように思う。そういう意味で、公共事業を担当される方は、みんな環境教

育をやるようなつもりで、川づくりと街の暮らしの関係を説明すればいい。川の流域をコーディネートしていくというのは、そういう発想がなければ、単なる利害調整で終わってしまうと思うんです。

残間 さっきの石川先生の、一つのところにずっといて、おのが川と思うまで居続けるという話ですが、ダメな人は何百年いてもダメなのでは……。(笑)物の本質を見極める目は、勘と自分の中に集積してきたものをどうやって繋げるかという創造力の問題だと思うので、15分その河畔に立っただけでも、わかる人はわかるんですね。150年いてもわからない人はわからないので、ずっといて、おれの川というのは、今の時代でいうと弊害の方が多いような……。

石川 公務員試験をちゃんとやって、そういうセンスのある人をまず採る……。

残間 今の試験形態ではだめですね。

2010年への街づくりと川づくりについて提言します

松田 それでは最後に、2010年の街づくりと川づくりのあり方について、一言ずつどうぞ。

林 今まで出ていた議論はべき論、自然環境であるべきだとか、あるいは装置であるべきだとか、べき論が当然ある訳ですが、じゃほんとにそうするのが良いのかと誰が決めるのか、河川は誰のものか。周辺住民のものなのか、遠隔地から来て利用する人のものであるかもしれない。川はこうするんだということを決めるのは誰なのか、というのはものすごく難しいんだと思うんですね。そのとき建設省の役割というのは、べき論は余り言うべきでないと思う。べき論で言っているのは、人が死ぬ、治水なんかそうですね。あるいは生活できなくなる、利水がそうですね。それから地球環境ですね。さっき申し上げたけれど、メニューを誰が決めるんだかよくわからないけれど、その時にお金がかかるのであれば、こういう補助制度があります、アイデアが必要になったらこういうアイデアがありますというメニューを整備していく、というのが公の仕事。その時も一般論のメニューじゃなくて、多彩なメニューに留めて、べき論みたいな話はお役所でしない方がいいんじゃないかなと。それは街づくり全般について言えることだと思うんですが、河川についても、残間さんがおっしゃったように、河川を装置と言い切るのはおこがましい、自然に対して僭越になるかもしれませんが、もちろん自然の恐ろしさとか脅威については十分意識しなくちゃいけないと思

ますが、その上で、装置として考えて、どういう装置をつくるのかというのは、誰かが決めていくとき、そこに対して多彩なメニューが準備されている、それで十分じゃないかなと思います。これから21世紀に向けて、街の中の川をつくっていく時はそうじゃないかなと思います。

残間 私は、林さんの装置としてとらえるというお話はとても新鮮で、自分にも合っているというか、良いなと思ってお聞きしました。だから、英知を結集できるような装置になるべきなんですね。べき論はダメだと言われたけれど、私、日本国は今、べき論がなさ過ぎてダメだと思っていますので、どんどんべき論はした方がいいんじゃないでしょうか。妙に情緒過多にとらえるより、きちんとそこは割り切って考える。ドライに考えていっても、大平さんがおっしゃった街づくりと離反するものではない、一緒になり得るなと思っていたんですね。今日は話題が2010年ですが、最近、2005年とか二千何年という、私も生命の残存年数がだんだん減ってきたものですから、つい自分の年齢と重ねてしまうのですが、我々、団塊の世代が老人層に参入するのを超高齢社会と言うわけですが、わずか二十数年間で超高齢社会に突入してしまう我が国ですから、予測出来ないことはたくさんあると思うんですが、世界に例を見ないような超高齢社会の中で、河川空間というのは可能性のあるライフステージになっていくだろうと思います。治水だの利水だのということも重要ですが、これまでのように高齢化社会というと、即、ゲートボール場と言わないように、もう少しそこに人生の新しいプログラムの可能性があると合わせてほしいですね。河川環境という言葉が出ましたが、さらにつきつめて、河川景観も問題です。つまり川にとっては有り難迷惑な施設がこれから川の周辺にどんどん出ていく可能性があって、規制緩和の折、そんなことを行政指導しろというのも変な話ですが、「河川空間が皆さんのところに戻ってきましたよ」と言った途端、エッと驚くとんでもない物が建ってしまう。大体それは自治体が建てるんですが、これからは、河川事務所がセンスのコードを持って、積極的に意見を言っていけないといけませんね。河川景観条例までいくのが行き過ぎかどうかは別として、川のそばだから何でもいいでしょうということも困ります。水飲み場一つとってみても、運動公園一つとってみても、気になるんですよ。川がみんなに開放されたからといって、こんなものが建っちゃ川も迷惑よねという物があると。この辺も次のテーマとしてあるかなと思っています。

村橋 今のお話に関連づけて二点述べます。一つ目は計画論に関わる話ですが、私は川は人間がつくった都市内の疑似的自然空間であり、重要な公共空間であると考えていますが、その川が初めに言いましたように、街づくりの関係からみると少し断絶があるので、この際、川のあり方については、都市計画のテーブルにきっちり位置づけられたらどうかと思います。それは堤外地の一部も含めて、川そのものを広く都市計画の広域的、総合的な視点の中にしっかりと位置づけ、河川整備と水辺環境整備の方策を確立することです。二つ目は、具体的なつくり方についてですが、これからの河川や水辺空間を整備するとき、一種のエージングの思想、年を経ていくに従ってだんだんという意味で熟成していく、あるいは落ちついていくという作り方に配慮してはどうかと思います。もっと単純な言い方をしますと、100年経ったら文化財や、文化的な空間として、その地域が誇れる空間になるような作り方です。もちろん川の本来の機能を発揮しつつ、それに文化的地域の誇りとしての機能が発揮されるような空間づくりです。一例として、京都の琵琶湖疏水に哲学の道がありますね。これは全く人工的な空間でして、現在では別に導水路が作られ、この水路自身は水の供給機能を果たしていませんが、南禅寺にある水路閣は機能しています。私も京都にいますから、かつては飲み水としてこの水を使っていましたし、今は完全に文化的な空間として一つの魅力を発揮しています。これからはエージングということを考慮した作り方を工夫することも大切ではないかと思っています。

松田 一つ目の都市計画の中で位置づけよというのは、現実にはかなり進んでいて、計画のオーソライズというか、透明性を確保せよという動きがあったとき、河川の計画も都市計画の中で位置づけよということを建設省から提案したとき、地方自治体がビビって、「川だ、ダムだというややこしい話を都市計画に持ち込まれたら困る」といって返上の話があったこともありました。

村橋 現在の都市計画制度の運用をみると、事業のための都市計画の性格が強過ぎますが、幅広い視点から川を整備し、管理するに当たっては、都市計画的な手順を踏んだ方が地域の各層、各分野との調整が、しっかり出来るのではないかと思うからです。川のあり方をこう考えますというのを、堤外地を含めて考える際に、当初から具体的な土地利用、都市施設、市街地開発の計画との整合や、地域住民との合意形成をめざして、都市計画のテーブルを活用してはどうかというものです。例えば用途地域にしても、川

と接する土地の用途は、川の持つ役割とは一般的に断絶しています。もっと川と周辺の土地利用が馴染む空間のあり方があってもいいのではないかと。これについては、街づくりの担当者も視野を拡げなければならないと思います。

松田 いつも思っているのは、20年以内に実施する見込みのないものは都市計画決定するなというのは、話、逆だろうと。すぐやるものは都市計画に掛けないで、50年後、100年後にやるようなものを掛けると。全く方向が反対なものだから不思議に思うんですが、今や住民を納得させるための手段みたいな議論ばかり先行して、本来の長期的な都市計画ではないのでは……。

大平 先に都市計画の話を書きますと、河川審議会と都市計画審議会の小委員会みたいなところで、合同で都市の中の川の価値みたいなことを再評価して、街づくりの中に位置づける方法論を考えようじゃないか、というのが間もなく出るはずですよ。私は荒川で川づくりの主役は、「荒川に集う人達ですよ」と言ったら、「今ごろええ格好しやがって」と住民の皆さんから言われたわけですが、そういった中で、我々は川のプロとして「あなたにとっての荒川の価値は何なのか一緒に探しませんか」という呼びかけをしたんですよ。それに賛同していただいた方が結構いたので荒川学会というものが出来たんですが、そこで思ったことは、まだ、目に見えないバリアがあるんですね。そのバリアをどうぶち破るかとなったとき、周辺との一体性も考えながら、川というのはもっと身近にあるものだと思ってもらわなくちゃいけない。これからは、シンボリックな事業を大々的に展開しなくちゃいけないのかなと思っています。これはアイデアですが、例えば隅田川の浅草のところに松屋というデパートがあるんです。東武電車が中へ入ってきているところ、あれを今、再開発で建て替えようというアイデアがあるんですよ。せっかく建て替えるなら、デパートの下の部分に、堤防をぶっ壊して船着き場つきのステーション、船着き場を作ればすぐ買い物に来れる、こういうことも出来るのかと。

それから、橋の上は今、使ってはいけないう言っているんですが、橋の上に駅をつくる、あるいは橋を二段にして、トラクターミナルをつくって、そこで船に荷物を積みおろしたり、人が乗り降りしたり、川は今までとは違うんだというプロジェクトをどんどん出していったらどうか。それによって目に見えないバリアが取れるんじゃないか。都市局の方に「街も同じようにバリアを取りましょうよ」と言ったら、総合性がどうで、川だけを取り上げる訳には

いかんみたいな議論になっちゃって、今、環境でいこうかなという話になっているんですが、バリアを取るための仕組みが、お互い、要るんじゃないかなというのが感想でございます。

福井 私は決して冗談ではなくて、風水論を街づくりに生かそうと考えているんです。これは、決して占いではなくて、風の道、水の道を切らないという単純なことです。地下水脈を切らないというのは絶対の常識、それを風水論というふうに表示して、土地を読む、川を読む、事例と対話するというのをそろそろやらないと……。さっきの土木が時代から捨てられたという話の続きですが、今、我々にとって一番大事なものは、時間軸も空間軸もグーッと引いてみると、卑弥呼は土木技術者であって、殿様がそうだったはずなんです。国見をして、ここにお城をつくるぞと。河川改修をまずして、お城を建てて、武家屋敷をつくって、町人屋敷をつくってという街づくりをした、それが縄張りですね。縄張りをするのが土木技術者であって、縄張りの中で蠢いている私共後から生まれてきた土木技術者はかわいそうな場所にいるということなので、現代的土木技術者は時代から捨てられたけれど、もう一度卑弥呼的な土木技術者になって日本を生まれ変わらせたならどうか、そういう運動をしたいなと思っています。

もう一つだけ言わせていただくと、さっきの話と一緒にですが、公園をつくる人とお話をしている、都市の中に自然はつくれないというふうに都市行政としても思っています。人間こそ自然である、人間こそ文化的要素を無限に兼ね備えた自然である、人間だけが自然である。あとは装置という言い方か、言い方はいろいろあるんですが、人間こそ自然である、人間の顔が自然であるというスタンスで都市行政をやっているということです。

松田 公園緑地の人もそう思ってるの？

福井 ええ。

松田 それは大胆ですね。

福井 それは疑似的であるとか、装置であるとか。

松田 最後に石川先生。

石川 私は、河川という場合に、どうしても流域全体を考えたくります。つまり、河川流域全体を考えると、川づくりと街づくりの関わりについて、いろんなことが見えてくると思うからです。部分だけに気をとられると、物事の繋がりの意識が失われてきていて、それがいろんな種類の環境問題を起こしたり、あるいは公共事業の必要性を起しているように思うんです。そして公共事業が余りに

発達したことが、また、そういう物の繋がりを考える機会を奪ってしまっていることもあると思うんです。たくさんダムや河口堰を建設して、水に不自由なく暮らせるということが、自分の頭の上に降ってくる雨と自分が使っている水との関わりを意識を失わせます。そういう繋がりの意識を回復しなければ、いい街をつくっていくことは出来なくなる。川との関わりで考えたとき、福井さんは「川を読む」と言われましたが、流域全体の繋がりを見ることが必要で、そういう繋がりの意識の中で正しい自然認識も形成されると思います。

自然というのは、単に植物とか動物とかの生き物を指すものではありません。ウサギが山にいれば自然の一部かもしれないけれど、捕まえてきて、檻の中でニンジンを食べさせているのはもはや自然じゃない訳です。それでは人の手が加わっているから自然じゃないかという、そういうこともありません。例えば、日本の風景の中で人の手が加わっていないものは探すのが大変ですが、人が加わっていたとしても、田舎の山とか川には自然性を感じます。それはそこでの人の営みとそこにある地物のつくるシステムが自然的に機能しているからです。人の手が加わっていても、全体が一つの自律性を持ったシステムとして機能している限り、我々はそれを自然的なものと感じると思うんです。福井さんが言われたように、都市の人間活動においても、ある種の自然な運動はあると思います。それが街づくりの基本ではないでしょうか。公共事業には、ある意味ではそういう自然な運動を断ち切る性質があるように思います。しかし逆に、断ち切られている物事の本来の繋がりについて、公共事業をやっている人は、自分で携わっているわけですから気づくことが出来るはず。そういう意味で河川事業も含めて、今後、公共事業を進めていく時、どうしてこういう問題が発生して、こういう事業が必要になっているのかという物事の繋がりを説明していけば、市民の理解も進んで、地域に密着した個性のある、いい川づくりが出来るのではないかと思います。

松田 皆様方から貴重な御意見、含蓄のある話をたくさんいただきました。ほんとに自分自身の勉強にもなりました。河川や都市の議論をしていくと、最後は人間の生活の話にまでいくようではありますが、私共リパーフロンティアセンターも、今後ともよりよき河川像を求めて努力して参りたいと思っております。お忙しいところ長時間にわたりありがとうございました。